
私篇 『続・のだめ』 サン・マロの奇跡III

瓢六玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私篇 『続・のため』 サン・マロの奇跡IIII

【コード】

N0728L

【作者名】

瓢六玉

【あらすじ】

のためリサイトルはフィナーレを迎えた。それは「のためリジェンド」のはじまりだった。

モーツァルト、バッハ、ベートーヴェンときて、プログラムの最後はスペインの作曲家アルベニスの作品群であった。

『セギデイーリア』は、まるで往年の名手タリアフェロを彷彿させるヴィヴィッドな演奏で、しかもフラメンコのコンパスが正確で、のだめの背後にバイラオーレが踊る姿が見えるかのようであった。

それまでじっくりと不動の姿勢で聴いていたランベール婦人の会のご婦人方も知らず知らず爪先や指先を動かさずにはいられなかった。

のだめは伝説の女流名手よりさらに切れのいい冴えたアップテンポで10秒も速く流れるがごとく弾き切った。

フィニッシュするとワツと歓声と拍手が湧き起こった。

まるで短距離スプリンターが世界新記録を出したかのような興奮ぶりだった。

のだめは立ち上りもせず座ったままに横向いてニコリと微笑むと、軽くペコリとお辞儀しただけだった。

続いて『赤い塔』。

細かいアルペジオが湧きあがるつむじ風のように聴衆の足元を駆け抜けた。

そして哀愁のある主題が現れると、そのオリエンタルな切なさが聴く耳を釘付けにさせないではおかなかった。

中間部に入ると一転して勇壮な響きが教会の天井に響いた。

のだめは一音一音指先から魂を鍵盤に込めるように打鍵した。

ふたたび主題のメロディーに回帰するとアテンポのはずなのに、あきらかに最初より速くなっており、それはのだめのパッションの高ぶりとともにラストに向かってさらにアツチエレランドした。

そして、コーダで長調に転調するころには最大速度に達しており、またしても二ヶ目の世界新「金」のようなゴール・フィニッシュとなった。

聴衆は割れんばかりの拍手とともにスタンディング・オベーションで称えた。

耳の肥えたフランス人の音楽ファンたちが東洋の乙女が弾くスペイン曲に圧倒され酔わされていた。

リサイタルのメは、名曲の『コルドバ』だった。

これにはスペインの人間国宝的ピアニスト、ラローチャの名演がある。

教会の鐘を模した静かな重音が肅肅と奏でられた。

それはピアノの高音部で本物の鐘の音のように聴こえた。

鐘がやむと、またしても東洋風のリリカルな旋律が歌うようにはじまった。

それは、のだめの魂の深部から表出してきた唄だった。

聴いている誰もが東洋のリリズムに胸の奥がキュンと鳴った。

二短調から二長調にメロディーが変わると、やるせないような気分は抜けるような青空を仰いで地中海の陽光を燦々と浴びるかのような爽快感に移ろった。

そして、フラメンコギターを思わせるようなアクセントのついたアルペジオをさながらイベリヤ半島の乾燥した空気のようにカラリと表現した。

やがて短調の主題が再現し、のだめはけっして高ぶらず、長いリタルダントで冒頭の鐘に呼応するかのようにならぬ消えゆくようなフィナーレで曲を閉じた。

二短調のコードが消えても、のだめはすぐには立ち上がらなかつた。

教会の天井のエコーが消えてから数秒して、のだめは笑顔で立ち上がった。

聴衆たちは魂消たような瞬間から我に返って、ワーツと歓声をあげた。

教会には似つかわしくなくらいの盛大な拍手とともに

「ブラーバツ！」

「ノダーメ！」

という声があちこちから掛けられた。

千秋も我を忘れて立ち上がり拍手を贈った。

(たいしたやつだ…)

と、あらためて我が彼女の奇才、いや、天才ぶりに驚くばかりだった。

黒木やターニヤ、フランク、リュカ、ユンロン、ヤドヴィたちも、のだめの名演奏に畏れいって溜め息まじりで拍手を贈っていた。のだめは何度も頭をさげた。

拍手はアンコールが弾かれるまで鳴りやまなかった。

ピアニストが椅子に座ると豪雨のような拍手がピタリとやんで、教会はまたシンと静寂に包まれた。聴衆はあたかも、これからリサィタルが始まるかのような錯覚さえした。

のだめは座ってからしばらくポーツと天井を仰ぎ見ていた。まるで、誰かと対話しているようだった。そして、意を決したように打鍵した。

パガニーニの『カプリース第24番』の主題だった。

それは、桃大在学中に出たマラドーナ・コンクールで2位になった瀬川悠人が本選で弾いた自由曲だった。

先日、偶然、千秋がネットを検索していて彼の自殺記事を見つけ、のだめを驚かせたのだった。

のだめなりに、彼へのレクイエムとして選曲したのだろう、と千秋にはわかった。

リスト編曲の超絶技巧の曲を、のだめはさらにその上をいく編曲を自らがして、さながら即興曲のように二十もの変奏を華麗に、とくに悲しげに弾きあげた。

そんな複雑な事情をまったく知らないヨーロッパの観客たちは、唯ただその見事な腕前に舌を巻いて賞賛するばかりだった。

アンコールの二曲目は、これもマラドーナ因縁のショパンの『エチュードOp.10-4 嬰八短調』であった。

サーカス的な超絶技巧ばかりでなく、ハリセンをして「ブラボー」と言わしめ、「こいつには千秋に貢がせるだけの何かがあるんや」と思わしめた件くだんの曲である。

そして、三曲目はリストの『超絶技巧練習曲 第4番 二短調 マゼツパ』だった。

これはルイに対抗してオクレール先生の前でガムシャラ弾きをしてダメ出しされたものである。

無論、その後、課題曲として先生にはOKをだされたものである。元来持っていたテクニクはさらに磨きがかかり、そしてオクレール先生の指導のおかげで、音楽の深い部分まで表現できるようになっていた。

そのことを、のだめ自身よりも日本からずっと一緒にいる千秋がいちばんよく知っていた。

「アンコールの最後は．．．、ノダメの曲です．．．」

と言って、『モジャモジャ組曲』から愛らしい小曲『もじゃもじゃの森』をサラリと、しかも稚気たつぷりに弾いて、のだめは万雷の拍手と歓声を背に飄々と舞台奥に消えた。

この日のライブCDとDVD『Melville! NODE ME』は予約発売の段階で百万を突破するワールドワイドのミリオ

ンセラ―となった。

シュトレ―ゼマンとのロンドン・デヴュー・ライブ盤の『Amazing!・NODEME』とともに、のだめの世界的名声は不動のものとなり、相次ぐコンサートとレコーディング依頼が舞い込んできた。

のだめレジェンドはまだ、ほんの序章がはじまったばかりだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0728/>

私篇 『続・のだめ』 サン・マロの奇跡III

2010年10月12日05時32分発行